

平成16年 5月26日

ベトナムの建築事情－研究と国際協力－

生活機構研究科生活機構学専攻教授 友 田 博 通

1992年9月から始めたホイアンの町並み保存調査と家屋修復は、1999年ユネスコ世界遺産登録へと結実し、昭和女子大学国際文化研究所はベトナムで高く評価された。そのため協力事業は、ベトナム全国の民家調査と JICA 開発パートナー事業、ドンラム村農村集落保存、ハノイ古い町保存整備、中国麗江民家修復技術移転などへと発展した。この間、町並み保存条例の効果・家屋修復の原則に関する研究、周辺国から見たベトナム民家史研究、さらには日越建設省協力事業として新しい住宅を対象としたベトナム都市住宅調査にも携わった。そしてさらに、住宅建築分野から衣服・食物を含む総合的な生活向上を目指した研究・国際協力事業へと発展拡大中であること、対象をベトナムから中国・韓国へと拡大しつつあることなどを報告した。

平成16年 6月23日

学校建築における家具

生活文化学科助教授 木 村 信 之

日本の学校建築の歴史的背景を踏まえ、教育や学校施設のオープン化が図られるようになった経緯を説き起こし、オープン化を象徴する空間である多目的スペースの持つべき機能とそのための家具の重要性を示した。次いで、児童の体位、持ち物量、学習形態などを考慮した上での学校用家具の規定、今日の課題、コンピュータスペース、多目的スペースなど、新たな形態の家具の必要な、新たな学習スペースにおける家具計画の考え方を示した。さらに、学校の保有する家具や物品の種類、量などの現状について実態調査のデータを下に明らかにし、学校施設計画における家具計画・ファシリティマネジメントがなされていない現状の問題点を示し、その重要性を指摘した。最後に、心障学級の計画における家具の特殊性についての研究の遅れ、余裕教室の活用を図る上での家具の種類・量の不足の現状とそのことに起因する余裕教室活用の不十分さを指摘し、学校施設における家具に関わる状況を俯瞰した。

平成16年10月20日

ドイツの文化財登録制度の現状とその課題

生活文化学科教授 堀 内 正 昭

ベルリンでは1995年に文化財保護法の改正に伴って、登録された歴史的建築のデータベースをインターネット上で公開した。当地では、所有者側の無許可の改修により文化財の登録抹消という事態が生じていたからである。公開することで、所有者をはじめ利害関係者や研究者に至るまで、文化財の周知をうながす大きな武器となることが期待されている。ベルリンでは別出版物として文化財目録が刊行され、データベースに加えて文化財の詳細な情報を得ることができる。本発表では、歴史的建築リストの内容、登録抹消の背景とその事例、文化財登録の利点（税の優遇措置）について、ベルリンでの取材をもとに具体的な報告を行った。

なお、筆者は本講演の内容に新たな知見を加えて、本学の『学苑・人間文化学科特集』（No.773）に「歴史的建築をいかに保護していくか～ベルリンの登録文化財の現状と課題」と題して発表したもので、詳しくはこちらを参照されたい。

平成16年12月 1日

一ドイツ人女性の見た日本の暮らし

生活環境学科助教授 栗 原 草 子

昭和八年（1933年）、その頃京都に出来たばかりの日独文化研究所に、一ドイツ人女性が講師として招かれ来日した。ケルン生まれ、ハノーファー育ちのエンネ・ゲルベルさん。京都にも、外国人の姿は極めてめずらしい時代であった。翌年、佐野一彦氏と結婚。日本人となった、えんねさんはそれからずっと日本で暮らした。妻として、また母として、戦前、戦中、戦後の日本にあって、戦時中は、岐阜県の田舎に疎開し、土地の人と共に田畑を耕した。戦後の食糧難の時代には、